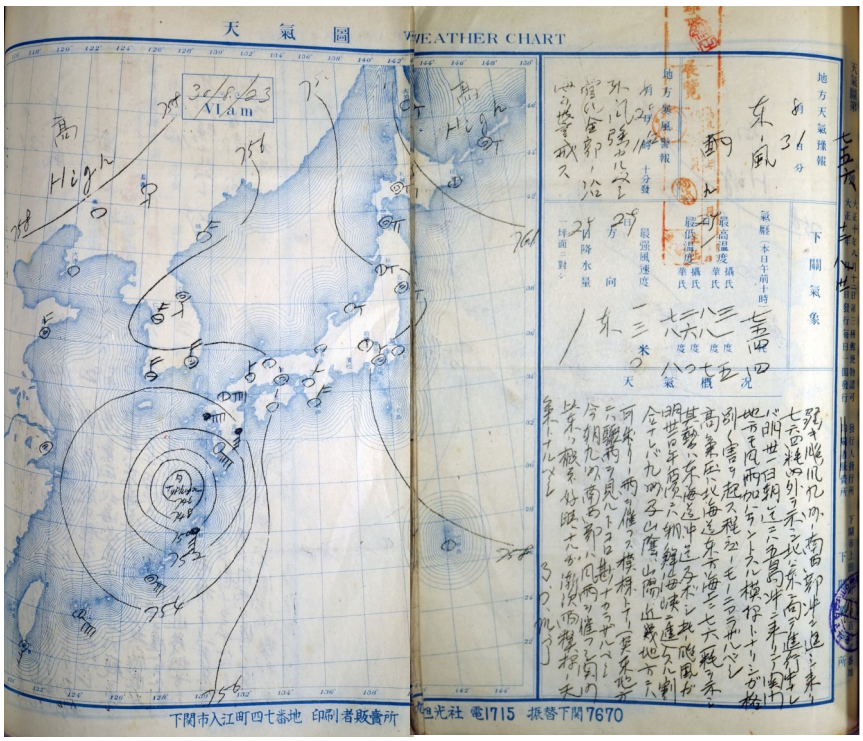
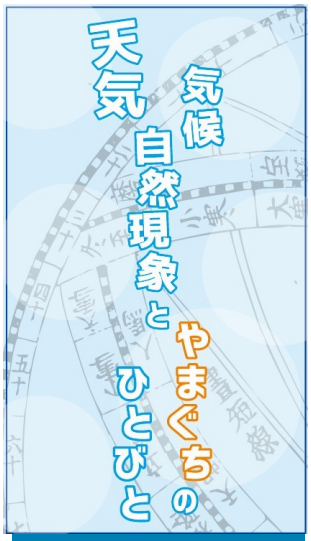




「天気図」[大正12年(1922)8月30日午前６時](厚狭郡役所文書17-1)

天気 ⑥

あの日の天気は？～戦前の天気図から～

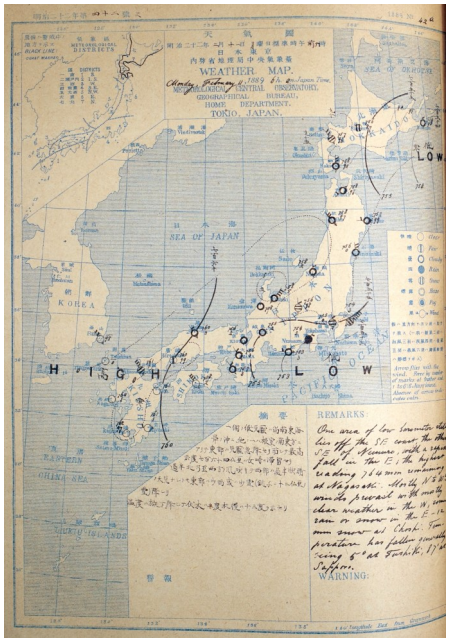
《気象観測と天気図の作成》

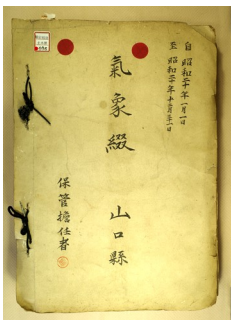
わが国の気象観測は、明治5年(1872)、函館に気候測量所が開設されたことに始まります。そして明治8年、東京気象台(のちに中央気象台と改称、現気象庁)が業務を開始し、さらに明治16年に天気図の作成が始まりました。下関測候所(赤間関測候所、現下関地方気象台)が設置され気象観測を始めたのもこの年からです。翌明治17年からは天気図が印刷配布されるようになり、1日3回、全国の天気予報が発表されるようになりました(気象庁ホームページより)。

当館には天気図のまとまったものとして①梶山家文書(中央気象台発行:明治21年(1888)～明治24年)、②厚狭郡役所文書(下関測候所発行:大正11・12年・14年)、③県庁戦前戦後土木部文書(下関測候所発行:昭和19年(1944)・20年)などがあります。これらの中から、歴史の教科書に出てくる大きな出来事が起こった日がどのような天気であったのか見てみましょう。

《大日本帝国憲法発布の日》

大日本帝国憲法(明治憲法)は明治22年2月11日に発布されました。下の図は1日に3度作成されていた天気図のうち、2月11日午前6時のものです(「天気図」〈梶山家文書207〉)。





天気図の入手「気象綴」(戦前戦後土木部406)

厚狭郡役所文書の天気図に、値段の記載があります。これによると、大正12年における、1年間の価格は16円、半年が8円50銭、1か月が1円50銭でした。

写真の「気象綴」には、戦時中、軍事機密として一般には配布されなかった天気図が綴られています。これは県の河港課が高潮や洪水予報のため、天気図の厳重な管理に関して誓約書を書いた上で特別に頒布されたものでした。表紙の赤い丸印の所に㊙印が押されていました。

天気概況は次のとおりです。

「一個ノ低気圧ハ尚南東海岸ノ沖ニ、他ノ一ツハ根室ノ南東方ニアリテ東部ハ気圧急降セリ、而シテ最高示度七百六十四仏厘ハ長崎ニ滞留セリ、過半北乃至西方ノ風吹キテ、西部ハ過半快晴ノ天気ナレトモ東部ハ少雨或ハ少雪(銚子二十二仏厘ノ雪)降レリ」

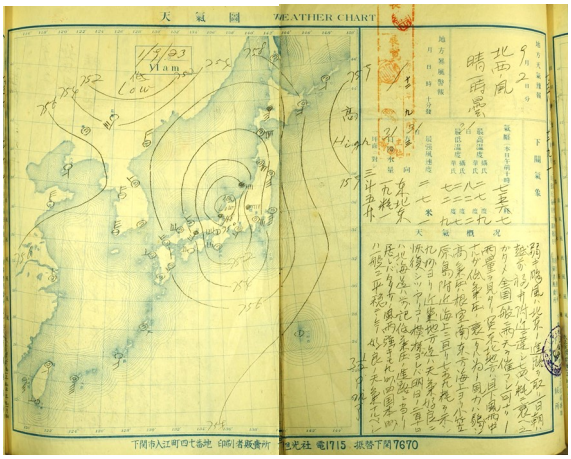
西日本は概ね晴れで、東日本の一部で雨や雪が降っていたようです。午前6時の赤間関(下関)測候所の観測データは、気圧761・風NW3・雨量7(24時間)・温度1度・天候雪となっています。なお、気圧の「764仏厘」などは当時の気圧の計測単位(水銀柱ミリメートル)による値で、1気圧は760㎜Hgでした。

「東京全市は十一日の憲法発布をひかえてその準備のため言語に絶した騒ぎを演じている。到るところ奉祝門・照明・行列の計画。だが滑稽なことには誰も憲法の内容をご存じないのだ。」

これは、お雇い外国人ベルツが憲法発布前の様子を書いた有名な文章です。彼がこれを書いたのは憲法発布の2日前、2月9日ですので、その日の天気図を見ると全国的に曇り空でした。昼間の曇り空と憲法発布直前の街中の狂騒を思い出しながらこの文章を書いたのでしょう。

《関東大震災》

大正12年年9月1日午前11時58分、未曾有の地震が関東地方を襲いました。次は、下関測候所が発行した午前6時の天気図です(「天気図」〈厚狭郡役所文書17-1〉)。



「弱キ台風ハ北東ノ進路ヲ取リ、一日朝ハ越前福井付近ニ達シ七四八粍ニ衰ヘ、之ガタメ全国一般ニ雨天ヲ催ヲシ、カナリノ雨量ヲ見タリ、口東北地方ハ目下風雨中ナルガ低気圧ノ衰ヘタル為メ風力ハ弱シ。高気圧ハ根室南東方海上ヨリ小笠原島付近海上ニ亘リ、七五九粍ヲ示シ九州ヨリ近畿地方迄ハ天気好良ニ恢復シツツアリ。コノ模様ニヨレバ、明日ノ二百十日ハ北海道ハ前記低気圧ノ進路ニ当リ居レバ多少ノ風雨強キモ、九州、四国、本州ハ一般ニ平穏ニシテ好良ノ天気ナルベシ」

心配された台風(前頁冒頭の天気図を参照)は勢力を弱め、台風の過ぎた西日本は天気が快復しつつあることを告げています。これから低気圧が近づく北海道以外は翌日の「二百十日」は平穏な天候になることが予想されています。台風一過に人々は一安心といったところです。

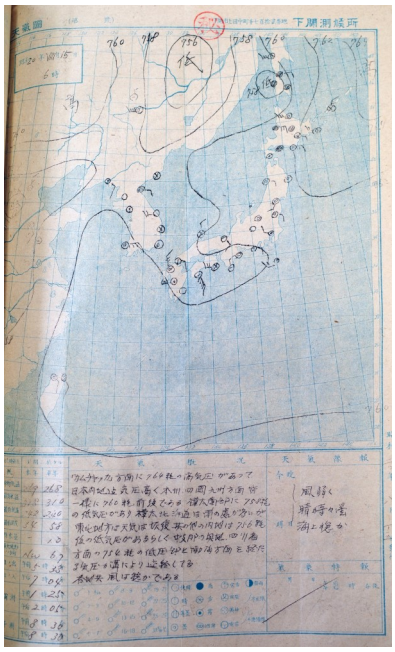
ところが思いもよらぬ大地震がこの半日後、関東地方を襲います。当然、9月1日の天気図では震災のことには触れていませんが、翌日の天気概況には「浜松以東震災ノ為電報不通」とあり、震災の影響で気象情報が入ってこなかったことが書かれています。

《終戦の日》

最後に、昭和20年(1945)8月15日、終戦の日の天気を見てみましょう。この天気図が綴じられている「気象綴」(県庁戦前戦後土木部406)は、前に紹介した２つの天気図とことなり、表紙や各天気図に「極秘」または「秘」の印が押されています。これは、戦時中、気象に関する情報は軍事機密で一般の国民には知らされなかったためです。この日の天気概況は次の通りです。

「『カムチャッカ』方面に764粍の高気圧があって日本内地迄気圧高く本州、四国九州方面皆一様に760粍前後である。樺太南部に758粍の低気圧があり樺太北海道は雨の処が多いが東北地方は天気は恢復。其の他の内地は756粍位の低気圧があるらしく中支那の奥地、四川省方面の754粍の低圧部と渤海方面を経たる気圧の溝により連絡してる。各地共風は穏やかである。」

全国的に風は穏やかなものの、翌日発表の気象データを見ると、最高気温33.7度という暑い日であったことが分かります。このような天候のもと、正午の玉音放送により国民に終戦が告げられました。



翌16日の天気図には「本日は受信せる観測材料甚しく少き為め天気図の正確を期し得ざるを遺憾なり」とあり、終戦による混乱が窺えます。また、15日の天気図には朝鮮半島各地の気象観測データが記されていますが、この後、大陸の気象データの記載はごくわずかになっています。